

200年の伝統を誇る

伊木力(長崎県)みかん

長崎県多良見町農協生産販売課長

山口 弥三

日本農業の成長作物として増植されたみかんも、昭和47年には350万トンを超え、近い将来400万トンに達することは明かである。

反面、みかんの価格は、生産費を割る産地も出るほど暴落し、みかん生産者は、日本農政の無計画的な指導に憤りをおぼえるとともに、その将来に大きな不安をいだいている。

このような情勢下にあつて、各みかん産地では自らも反省し、産地間競争に勝ちぬくよう最大の努力がはらわれている。伊木力みかんもその例にもれず、先祖から受けついできた200年の歴史と伝統を守るとともに、伊木力みかんの銘柄確立のために、生産対策はもちろん、販売戦略等に努力している。以下、伊木力みかんの概要について述べる。

1. 立地条件に恵まれている

みかんの生産に、立地条件が関係することはいうまでもない。伊木力は大村湾に面し、年平均16、15°Cの暖かい気温と、安山岩を母材とする肥もちのよい土壌、日照のよい適度な傾斜地等、うまいみかんができるための立地条件に恵れている。

2. 伊木力系統に統一されている

品質を揃えるために、系統を統一することは大切なことである。伊木力の先人たちは、優良系統への淘汰に特に努力し、遂にこの土地に合った伊木力系を確立した。これは、日本の温州みかんの系統の基礎をつくったといわれている。

早生温州は宮川系(最近、興津早生が増加している)であるが、普通温州は伊木力系に統一されて、今なお、たえず優良系統への淘汰が行なわれている。

3. 成園率が高い

歴史が古いから成園率が高い。幼木、若木のみかんより、成園のみかんのほうが、味がよいのが

普通である。

大体、出荷されるみかんの約8割は成園のみかんである。

4. みかん作りとしての根性

伊木力の立地条件は、みかん以外の作物では生活の根拠とはなり得ない。現況のみかん以外は、自家用程度の米を除いては、何もない。したがって、農協も99%みかんで成立している。500戸の生産者は、1,500トン、13億円のみかんに生活をかけ、産地間競争に勝ちぬく信念をもっている。

5. 生産技術水準が高い

生産技術も経験が古いことと、専業経営が多いので、技術水準も高い。現在では柑橘同志会を中心に、部落ごとに毎月定例研究会を開き、技術員の指導によって研修に努めている。更に婦人部や後継者の青年部をも柑橘同志会に設け、活発な活動を展開している。

6. 地帯別区分出荷による品質の統一

海岸線と山間部とでは、みかんの味がのる時期がちがう。海岸線は酸の減少が早く、2月頃になれば味が淡白になる。

山間部では1月末頃までは酸が強く、2~3月にかけてうまくなる。

このようなことから、農協の出荷計画も地帯別区分出荷によって、みかんの味の統一をはかり、市場性を高めることに努めている。

7. 販売の戦略と消費宣伝

うまい、きれいなみかんを作ることが先決であるが、上手に売ることができない条件である。

伊木力みかんは、好まれる市場を選定し、荷受機関をできるだけ制限している。市場を選定し、その市場の需要量に対して計画的に連続出荷を行い、市場性を高めることに努力している。

5大市場には少なくとも1億円以上のみかんを送る必要があり、現在東京3社、大阪1社で約8億円以上、約85%出荷している。

次に、市場や消費者の動向を知るために、絶えず連絡をとり、市場側の批判や要求をこころよく受け、改善を要する点は速かに改善している。

消費宣伝は少ない経費で最大の効果を狙うよう努め、過大な消費宣伝はつつしんでいる。

次に、伊木力みかんの技術的な問題点の1, 2をあげる。

1. 肥料の問題

みかんの肥料については肥料の種類, 施用量, 施用時期等, 品質に関係することは多いが, 未だ不明の点が多い。

伊木力では, 過去に肥料過多で失敗し, 危機を招いた時期がある。

昭和34年窒素成分で反当70~80kg程度施され, 肥料の種類も硫酸, 過石, 硫酸等の酸根の高いものが主として使用され, みかんの根の発育がわる

昭和49年みかん施肥基準

みかん施肥基準 成木10a当り 4t収量図

期 別	区 別	N		P		K	
		比率	量	比率	量	比率	量
春肥	4月上・中旬	60%	13kg	60%	12kg	60%	10kg
秋肥	収穫前より	40	9	40	8	40	8
夏	肥						
計		100	22	100	20	100	18

石灰類の施用

期 別	区 別	苦土石灰	グリーンマグ
		PH4.5以下	PH4.6以上
1月~2月		150kg	100kg
8月~9月		100	80
計		250	180

昭和49年春肥農協配合肥料設計

春肥1号 成木		春肥3号 成木		春肥4号 成木		備 考
成分	比率	成分	比率	成分	比率	
磷硝安加里 S 226	40%	磷硝安加里 S 811	35%	磷硝安加里 S 552	34%	春肥1号 成分 9:7:6.5 10a当施用量 7袋 春肥3号 成分 9.5:9:7 10a当施用量 7袋 春肥4号 成分 8:8:7 10a当施用量 8袋
くみあい 有機	15	熔 燐	8	くみあい 有機	12	
グ ア ノ	10	硫 加	7	魚 粕	17	
魚 粕	20	グ ア ノ	15	菜 種 粕	20	
菜 種 粕	15	魚 粕	10	硫 加	6	
		菜 種 粕	15	骨 粉	11	
		骨 粉	10			
計	100	計	100	計	100	

2. みかんの着色

市場側から, 色のうすいみかんの混入が多いと指摘されたので, その対策として昭和44年から, みかんの樹形改造を行っている。成園のほとんどが密植状態となり, 受光が遮ぎられるために, みかんの色がうすくなっていた。樹高を短縮し, 主枝, 亜主枝級の大きい枝の数をへらし, 結果部位を下げるようにした。

このことは, 色のうすいみかん対策だけでなく, 採取, 摘果等の作業

を容易にし, 人件費の節減・小中型農機具の導入が可能になり, みかんの品質向上と生産費の低減をねらって実施している。

以上, 伊木力みかんの概要を紹介し, 銘柄確立のため努力している2, 3の点について述べたが, 参考になれば幸いである。

このような危機に直面したので施肥改善, 土壤改良に全力が注がれ, 石灰類の大量施用, 敷草, 敷わら等の有機物の補給, 施肥量と肥料の種類改善等が速に行われたので昭和39年には完全に回復した。このことから, 昭和36年以来, 肥料は従来の酸性肥料から中性の加磷硝安を原料にした配合肥料にかえ, 現在の磷硝安加里まで引続き使用している。

現在の施肥基準はチッソ 20~25kg, リンサン 20~25kg, カリ18~20kg (反当成木園)で, 農協配合肥料の設計は別表のとおりである。

く, 昭和35年に斑点性の異状落葉が発生し, 翌年には完全落葉園が約30haに及び全園の%は同様の被害を生じた。

この原因は, 強酸性によるマンガンの異状集積で, 多肥と, 石灰を施用しないことによることが明らかになり, 当然みかんの品質も低下した。